

寮歌管見 (95・3・13)

梅田義孝 (昭19・文丙)

一、寮歌名曲の噴出

昭和一二年卒業を中心帯とした三高十二日会に、どういふ経緯か忘れましたが随分前に私、入っていただきまして、その後今から一〇年前の八五年の秋には、十二日会が三水会から引き継いで毎年実施していた欧州等家族旅行のひとつ「トルコ・ギリシア・エジプトの旅」に連れて行っていただきました。この旅行ではアテネで、夕食後に二千年前のその建物の屋上で、月を仰ぎながらみなさんと「紅もゆる」を歌った感動は、残る生涯決して忘れないでしょう。

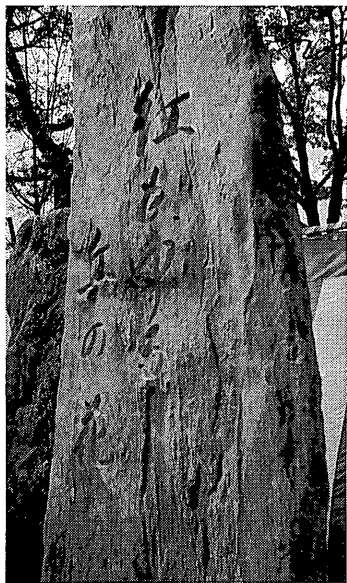
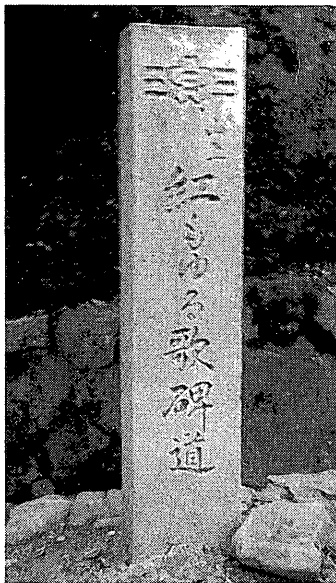
このような、私には懐かしい、感謝すべき思い出がありまして、今日はそのお返し、埋め合わせの積りでお話しいたします。ご指定のテーマにつきましては、みなさんご承知済みのことが大部分であるかもしれません。また寮歌類四曲とその他若干の節について「神陵史」編纂時に下原稿を書かしていただいたことですし、ま新しい内容は少ないですが、なるべく「神陵史」と重複

しないように、かつ補充するように配慮して進めます。時間の制約上、「逍遙の歌」を主体にして、いくらかの独断と卑見を加えさせていただきながらお話しいたします。

明治の末期近くになって、高等学校の寮歌として知られていくようになる名曲が相次いで現われまして、一般の青年男女にまで愛唱もされるようになります。明治三五年に一高の第一二回紀念寮歌「嗚呼玉杯に」が、三七年には五高の「武夫原頭ムツノゲンに」が、三八年から三九年の間に三高の「逍遙の歌」が生まれました。「逍遙の歌」は「一部三年乙」の歌と原歌譜に記されています。作詞者胡夷沢村専太郎が一部乙三年生だった期間は明治三八年九月から三九年八月までであったので、かく推定されるわけです。四〇年には四高の「ただに血を盛る」の南下軍の歌ができます。七高の「北辰斜に」も名歌として知られますが、歌詞の最後五番に「今年十四の記念祭」とありますから、七高の設立は明治三四年ですので、作歌の年は大正四年かと推定されます。因みに鹿児島高等学校としての設置は古くて明治一九年です。

二、逍遙の歌、の誕生

校歌として最初から全校生に歌ってもらおうとか、寮歌として承認制定するといった代表歌・寮歌が多い他校の場合と違って、わが三高の「逍遙の歌」は「一部三年乙」のクラスの歌として愛され歌われ、やがて全校の生徒に愛唱されてゆき、代表的な「三高の歌」となります。当時の



三高は大学予科として三部制の編成でして、第一部は甲類（英語法科、政治科）、乙類（英語文科）、丙類（独語法科、独語文科）から成り、第二部は甲類（工科）、乙類（理科、農科、医科）のうちの薬学科）から成り、第三部は医科でした。仏法あるいは仏文学を帝国大学の法科大学あるいは文科大学で専攻する者のための第一部丁類（文科丙類の前身）が増設されるのは明治四三年です。

曲については、ずっと同じ調子で歌われて来たと、私は単純に考えておりました。というのも、戦直後、河原町で買った、三高自由寮生徒有志吹込みの「タイヘイ四五八〇」というレコー

ドが、表は「逍遙の歌」裏は「琵琶湖周航の歌」でして、私どもと全く同じ調子とテンポで歌っており、このレコードは昭和の初め頃のものと思像されたからです。ところが同窓会本部所管のもっと古いオリエント・レコードのダビングテープを聴いて、まるで違う歌いっ振りに驚きました。ヴァイオリン伴奏の軽快なリズムで、かなり速いテンポで歌われ、同じ逍遙の歌かと疑うほどでした。に長調の音階で、如何にも行進曲的というか、散歩に合うような歌い方です。小野秀雄先生も三高時代ヴァイオリンの練習に通っていたと書いていますし、明治大正時代は、流行りの歌をヴァイオリンで弾いたり、伴奏にして歌うのが好まれていたのでしょうか。平田憲夫氏（明治43年2部乙卒）が戦後「島根三高会」に入会されて、「なつかしい『紅もゆる』の合唱をきいたのでしたが、その時に会員諸子によって歌われたこの歌は、わたくしたちが、その昔、三高在学時代に歌っていたものとは、歌詞ことに曲譜がかなり変わっていましたために、会員諸子の合唱に唱和することができなかつたのは、まことに淋しいことでした」（六四年の同窓会報二五号）と述べていることと思ひ合せますと、当初はかなり違った歌い方だと言えます。約四五年間の長きにわたって歌い継がれて来た「逍遙の歌」は、時代を経て相当変わった歌い方になった、と考へるべきでしょうか。こうした寮歌の持つ変化変容に気づかなかつた私は認識を改めなくてはならないようであります。

三、都の春はるに嘯せうけば——歌詞検証

歌詞については、変化変形した語句がいくつかあります。「三高歌集」の巻頭に掲げられている原歌譜の歌詞と現行一六版の歌詞と比較して申しあげます。まず一番では原歌譜第一行目「紅もゆる丘の花」は現行一六版歌詞では「紅もゆる岡の花」となっています。一五版歌集までは「紅萌ゆる岡の花」となっていました。世間的にも「紅萌ゆる、の三高の歌」で通っていたと思います。同窓会本部で、原歌譜の「もゆる」の仮名書きに改める配慮をされたのだと思います。「丘」は「岡」に変わっていますが、これはたいした変化ではありません。「友を憶ふ」という寮歌も「神楽ヶ岡の夕まぐれ」で始まっています。因みに京都の古い地図を見ますと、神楽岡通、吉田神楽岡町という通り名と町名があります。吉田山頂の阪倉篤太郎先生の筆になる歌碑は「紅もゆる丘の花」と原歌譜通りであります。

西田太一郎先生（昭7文甲）は昭和一七年、初めて三高の教壇に立ち、私どもに漢文を教えられたのですが、若くして優秀な漢学者だとの印象を受けました。その西田先生がご存命の頃、同窓会報五一号（七九年）に「紅燃ゆるが正しい」と題して、一種衝撃的な異議を出されました。つまり、「萌ゆる」とは「芽が出ることである。赤い芽を出すものといえればカナメモチがあり……赤くなるのは葉であって花ではない。赤咲きのツツジ・サツキのつぼみも花の開くしばらく前に

ならぬと赤い色は目につかず、赤咲きのツバキ・サザンカも開花直前にならぬと赤く見えない。……したがって、おおまかに言って、われわれの周辺に『紅萌ゆる岡の花』なるものは存在しない。『萌ゆる』は『燃ゆる』の誤りである。ある国語の辞書の『燃ゆ』の項に、いろいろの意味が書いてあるが、その一つに『赤い色の極めて鮮やかな形容』とあり……『紅燃ゆる岡の花』は『まっかに燃えるように咲いている岡の花』の意で、杜甫の詩をふまえているに違いない。わたくしは、『紅燃ゆる』と漢字で書かなければ誤りだといっているのではない。『紅もゆる』でもよい。しかし意味は『燃』の方であって『萌』ではない。」

さすが漢文の大家、語義と植物現象双方より攻めて間然するところなしです。まことに説得力大です。因みに、小川環樹（昭和4文丙）・西田太一郎・赤塚忠の共著の角川書店「新字源」の「萌」の字を見ますと「草の芽、ひいて、きざしの意を表わす」とありまして、さらにいくつかの意味を紹介しています。同辞典の「燃」の字のほうは「もえる、もやす、やく」の意味だと記されているだけで何とも素っ気ないです。原作者沢村胡夷は時治三五年、彦根中学校五年生のとき、薄田泣菫が大阪で編集していた「小天地」に投稿、掲載されたほどの早熟の詩人ですから、杜甫の詩は十分心得てはいたでしょうが、それを踏まえたかどうかは別としまして、「もゆる」の語義はよく吟味しての仮名書きだと思われまます。

一番で問題なのは「都の春に嘯けば」の第三節目が「都の花に嘯けば」に変わってしまった

ことです。意識的に強調するための仕掛けとして重複使用する場合は別として、四行のなかに二回も「花」を掲げることは均斉を逸しまししょう。「逍遙の歌」は一番から四番までに、春夏秋冬の順で自然と季節の美しさを詠んで、それらに託して若者の未来や希望や夢を謳いあげるといふ手法をとっています。五番で再び春に戻って、さらに四季を巡らせていきます。二・三・四番にはそれぞれ夏・秋・冬の字を配しているが、一番は春の字がなくて花の字が二回現われる、これは不自然です。原歌詞の春夏秋冬四語の各番配置は納得されましよう。三行目を花でなく春に戻してみると、全歌詞で花は二回、花嵐と花霞を含めると四回出てきます。春、月、胸は三回、岸、秋、空、夢は二回出てきます。

五番では「嘯く水や故都の月」が「嘯き見ずや古都の月」に変わっています。従って意味も変化して解されます。前述一番の「都の春に嘯」くのは、丘や岸が美しく彩られた春まったただなかに人間、つまり三高生が嘯いているとイメージされますが、五番では水、鴨川か白川か、川の水がさらさらと快い音を放って流れているさまを擬人法的に、水が嘯く、嘯く水、と表現しているように私には解されます。この五番は全歌中で最も非論理的というか、非散文的・情緒的な詩句の四行でして、四番まで四季を巡って来て再び春になる、それは三高生活の年度が進む意味もあるのでしょうか。光、つまり自然も、胸、つまり六百人の三高生の心にも、春の扉が開いて、はなやぎ舞いあがる如くだ、流れる水の水の音や古都に照る月が一層春心地をひきたたせるよ、とそんな

ふうに思えます。「此処にはもゆる六百の」「もゆる」は、前述の「もゆる」のどちらでしようか。人の心だから「燃ゆる」の意のほうが妥当のようですが、「萌ゆる」の意でもおかしくはないでしょう。春の「扉とに」は「戸とに」と変っています。扉とと読むことに抵抗があつて「戸と」に変わったのでしょうか、目で追えば「扉」のほうがびつたりの感触です。

ここで気付くことは、春の季節を背景として、一番と五番が、「花」「春」「月」「もゆる」「嘯」の字をほぼ対照的に配し、一番と五番は感慨の表現として見事な対応をなしていることです。多分意識的にそう作詞したのでしょう。私の所見では、この歌の歌詞は五番まででも完結できたと思われます。もともと沢村胡夷の詩には長編のものが多く、一般に明治時代はその傾向だったのですが、この歌も逍遙という散歩、そぞろ歩きのための時間的需要も考慮し、また作詞者の興も大いに進んでか、六番以下再び秋、春と巡らせて一一番に及んでいます。従つて各高等学校の代表歌に比して歌唱時間が最も長いとされてきました。

四、岸に散る花嵐、山に咲く初紅葉——歌詞検証

六番は最も著しい変化を見せていまして、二節目の「三歳の春の花嵐」と四節目の「三歳の秋の初紅葉」が入れ替つてしまったので、何とも妙な風景感になります。沢村胡夷は三高生活三春秋を、春、岸に散る花嵐、秋、山に咲く初紅葉、に象徴させています。ところがいつしか二節目

と四節目が入れ替ったので。初紅葉はかなり続く筈なのに「岸に散る」ことになり、何とも不自然です。また、花嵐とは「花どきに吹く嵐」の原意ですが、日本では春風はつきみもので、強い春風のために、または花の酣が過ぎたために、花が散りしきるさまを嵐に譬えて言うのでしよう。六番でも岸に散りしきる花の風情を言っていると思います。それを、「山に咲く……花嵐」では矛盾を与え、妙なとり合わせに墮します。どうせ入れ替えるなら、各節の中をいらわずに、前二節をそっくり後ろに移したら収まりが宜しかったわけです。

沢村胡夷が彦根中学校を抜群の成績の優等生で通し、同中学校からその年唯ひとり三高に入学したのは明治三六年九月です。「神陵史」に詳しいことですが、九月入学は大正九年まで続いています。入学試験は同三五年から四〇年まで、全国八つの高等学校に統一試験を行って成績順に志望校に振り当てました。一高、三高に志願者の偏在が進んだための是正措置でした。同三四年の例では七月三日から五日間入学試験が行なわれています。

大正八年、大学令を改めて帝国大学の分科大学制を学部制とし、高等学校もこれに対応して制度改正を見て大学予科第一・二・三部制から、文科・理科としてそれぞれ語学により甲類から丙類までの編成としました。学年の学期開始も九月から四月に改めましたが、高等学校の入学期は大正八年・九年は従来通りの九月入学として過渡期措置をとりました。従って大正八年は九月入学ですが、この八年入学生から級編成は文科・理科の甲乙丙類となりました。理科丙類は大正一

紅もゆる丘の花
狭縁匂ふ岸の色
都の春に囀れば
月こそ懸れ吉田山。

緑の夏の芝蔭に
残れる星を仰ぐ時
希望は高くあふれつゝ
われらが胸に湧きかへる。

千載、秋の水、清く
銀漢、空に决る時
かよへる夢は崑崙の
高嶺の此方、戈壁の原。

ラインの城や、アルペンの
谷間の氷雨、なだれ雪
夕べはたどる北冥の
日の影、暗き冬の波。

ああ、故郷よ、野よ、花よ
此處にはもゆる六百の
光も、胸も、春の扉に
囀く水や、故都の月。

それ、京洛の岸に散る
三歳の春の花嵐
それ、京洛の山に咲く
三歳の秋の初紅葉。

左手の書にうなづきて
夕べの風に吟ずれば
碎けて飛べる白雲の
空には高し、如意ヶ嶽。

神楽ヶ丘のはつしぐれ
老樹の梢傳ふ時
穗燈かゝげ、吟む
先哲至理の教にも。

ああ、また遠き四千年
血潮の史や西の子の
榮枯の夢を思ふにも
胸こそ躍れ、若き身に。

希望は照れり。東海の
み富士の裾の山櫻
歴史をほこる二千歳
神武の子らの起てる今。

ああ洛陽の花がすみ
櫻もとの健兒らが
今、逍遙に、月白く
静かに照れり。吉田山。

(二) い)

(原歌譜)

一年に設立される東京
高等学校・大阪高等学
校のみに設置されます。
この辺の事情を仏文学
者の河盛好藏先生(大
正12・文丙)はその著
書「フランス語盛衰
記」(日経新聞社刊)
で次のように触れてい
ます。
「大正九年九月に三
高入学を許された私た
ちは翌年四月には早く
も第二学年に進級して
いた。それは九月に入
学しても大学には三月

に受験できるように学年の短縮があったからである。従って私たちは高等学校には正味二年七カ月しか在学しなかったことになる。学年短縮のため、一日の授業時間が多くなり、同じ先生に一日二度も教わるというようなことも珍らしくなかった。学生は大体関西人が多かったが、日本全国から集まって来ており、いずれもむつかしい試験をパスしてきた秀才揃いで、個性の強い、齒ごたえのある連中ばかりであった。」というわけです。

当時は制度改正によるとばかりでの学年短縮でした。ご存知だと思いますが、私どもは戦争中として、学生を工場と戦場へ急ぎ投入するために、二年半に短縮、実際は二年と一学期のみで卒業し、一〇月には大学入学で、昭和一五・一六・一七年高校入学期生に適用されました。河盛先生の時代と同様に、大学試験のレベルも三高でのテキストも従前と同じというわけで、第一外国語は文丙の例では一日に伊吹武彦教授に二回、さらに他の先生か外人に一回という凄まじい語学の日もありました。昭和一八年入学生については二年間の年限に短縮され、中学校も四年制になります。しかも一八年一二月から文科系は徴兵猶予制が廃され、学徒兵として入隊し、理科系等在学者は殆んど工場動員、という学制史上最悪の苦難期になります。

話を戻しまして、沢村胡夷が春、次に秋と詠っても、三高生は九月に入学あるいは進級して、まずは秋の季節を迎えるというわけでした、その感覚体験からいつからか、つい六番二節目を「三歳の秋の初紅葉」と歌ってしまったのでしょう。従って、原詞の言う、岸に散るべき花嵐が

岸に散る初紅葉となり、山に咲くべき初紅葉が山に咲く花嵐、と逆転し妙な風景描写になってしまった、と思うわけです。

五、ああ、また遠き四千年——歌詞検証

各番で少なからず漢語が変わっているものがありますが、実質的に語意に差違のないのには言及いたさぬこととしますが、八番三節目は「穂燈」がなにやらむつかしい「繫燈」になっています。言うまでもなく「穂」は穀物の実やその先端を意味し、転じて穂の形をした物、さらに穂の形に似る「ともしび」を意味します。私ごとながら昭和初期の幼年時代の山深い郷里では、これら穂の形の「ともしび」と電灯との共存時代でして、ランプのホヤを磨かされたり、種油の「ともしびの芯と穂先を不思議なものと感じて見詰めたものでした。他方、繫燈の繫の字は、弓の曲りをなすための道具である「ゆだめ」の原意から「矯める」の意になり、転じて「ともしび立て」の燈架、さらに「ともしび」自体をも意味する、と辞典にあります。子供の頃竹細工を曲げるのに火にあぶったものですが、弓も竹でして、その曲げには火を用いたとも聞きます。そんなところから、弓矯めの繫が「ともしび」にまで転じたのでしょうか。従って、ともしびをかざして先哲至理の教えをくちずさむのには、「穂燈かかげ」も「繫燈かかげ」もまず同じような修飾節ということになります。ただ、当時どちらが分り易い言葉だったかはきめつけ難いですが、一応穂燈

のほうに分り易かったと想像されます。なぜ、わざわざむつかしい方の語に変わったか、に私は疑問と興味を覚えます。総じて「逍遙の歌」は、むつかしい漢字や大言壮語調の用語はなくて、誰でも歌い易く覚え易い歌です。三高の代表歌たるにふさわしい名歌詞名曲だと思います。

古い時代、三高歌集は文芸部が出していたのか、寮が出していたのか存じませんが、昭和一〇年代は共済会が隔年毎に、昭和偶数年に、その年の新入学生用に間に合うように、かつ二年分の予想量を印刷発行していました。昭和一八年は私の時でして、戦時下紙もない、印刷屋も職人の召集や徴用で人手不足だという窮乏時代でした。途方に暮れて前田鼎校長の所に駆け込みましたら、こんな時代だ、歌集が出されないぐらい辛抱せいや、とのにべもないご返答でした。その時、校長室での先生は、当時（昭和17・18年）できたての未定稿の神陵史を読んでおられました。先生は本当にそう思っているのか、心にもない言葉を吐いているのではないか、と私は複雑な気持ちでした。結局、二一四三頁の謄写版刷り、三高歌集史上最底の粗末な歌集を刷りました。

九番の「ああ、また遠き四千年」は「二千年」と変化して、次の一〇番の「二千歳」と同じ二千になっていきます。原歌詞では九番と一〇番は、四千年と二千年が優れた詞句上の対比をなしている、と私は考えます。九番で「西の子」とは、四千年昔のギリシャやミケーネやエジプト以来の若き英雄や大人物のことでしょう。これらの人物や歴史が、血潮で彩られもして栄枯盛衰をして来たことへの思いです。一〇番では二千年の日本の歴史を美しい山桜に象徴させています。日

本の有史は四千年はないし、明治の人として日本の歴史の榮枯を血潮の史と表現する筈はないと思います。よって、九番は西欧文明を思い、一〇番で祖国日本の歴史を思う、という対比と受け取れます。

最終番一一番は結びの詞として、一番・五番に対応させた形で長い全歌詞を終らせております。発表当時に配られた一枚刷りには一一番第一節目は「ああ」となっていたものを「見よ」に訂正してあったとあります。「ああ」は五番と九番の頭にすでにあつて、三回とはくどい、とすぐ改められたのは至当でした。

六、詩人沢村胡夷の素像

作詞者沢村胡夷については、昭和四二年（六七年）、東京女子大生の大嶋知子さんが卒業論文に胡夷の作品を採りあげ、自費出版しました。「沢村胡夷全詩集」と題するこの一巻は胡夷の生い立ちと生涯にも筆を染めております。

この研究書を参考にして、明治一七年生れの胡夷の出自などに少しく触れてみます。胡夷の祖父沢村伝四郎が事業に失敗したため、胡夷の父伝次郎は幼い胡夷を祖父母に預け、妻即ち胡夷の母志けと彦根をあとにして台湾に移って鉄道技師として働きます。病弱だった志けは異郷の地で病臥の身となつて、離縁されてしまいます。彦根に残った胡夷数え年一〇歳の時でした。母志け

は敦賀の縁者に引きとられ、他方伝次郎は台湾から帰って再婚して京都に住みます。しかし伝次郎は義理の仲を案じてか、一人息子の胡夷を呼び寄せることはなく、胡夷はこの実父と義母フシ夫婦と生涯同居することはありませんでした。胡夷は三高に入學後は寺院・塔頭に下宿します。寮に入らなかつたのは不思議に思えます。従つて寮歌は作つてはいません。胡夷は祖父母によつて育てられ可愛がられはしたが、幼くして両親の愛に包まれる喜びを受けず、長じてはひそかに敦賀に母を訪ねていたようです。薄幸の胡夷に追いつちをかけるように明治三八年と推定される頃、この実母が亡くなりました。

三高に入つてからの胡夷は作詩活動が目ざましく、「文庫派」詩人として名をなします。生涯で一二九篇作詩しているそうですが、試みに明治三八年の作詩は二三篇で、「友と亡き母に捧ぐ」と副題のついた詩「哀歌」以降、哀愁に満ちた詩が続きます。三九年はわずか六篇でして、みな淋しい作風です。これら年余にわたる悲愁蕭々たる詩篇は、実母を亡くした哀しみが如何に深かつたかが滲み出ている如くでして、胸を打つものがあります。四〇年には三三篇の多作となり、徐々に心の傷から立直つていったようです。明治四〇年一月、京大一年生のとき、詩集「湖畔の悲歌」を京都で刊行しております。また、東大赤門派文学の「帝国文学」の明治三八年九月号に詩一篇が採用掲載されています。同四二年一〇月号には二篇掲載されております。後者には、後に三高仏語教授になる折竹錫先生が仏訳文を載せております。

明治三十九年九月、沢村胡夷は京都帝国大学文科大学文学部哲学科に入学し、美学美術史を専攻して同四十二年卒業と同時に、恩師滝精一博士の世話で東京の国華社に勤めて美術誌の編集と執筆に携わります。また、東大の大学院に在籍して学究を続け、美術学校や女高師の講師を勤めます。作詩は大正四年でやめておりますが、頼まれて母校彦根中学校の校歌は大正一五年に作っています。在京一〇年を経て大正八年九月に京都帝国大学文学部助教授として入洛します。

大正八年九月（一九一九）という年月はある種の感慨を与えてくれます。と申しますのは、この年この月にこそ、不朽の名歌「逍遙の歌」の作者沢村胡夷は美術史学者として東京から京都に一〇年ぶりに戻り、これまた不朽の名歌「琵琶湖周航の歌」を前年七年に作った小口太郎は三高第二部を卒業して新制度の学部制の発足した東京大学理学部入学のため、いわば入れ替りの如くに京都を離れるのであります。明治一七年（一八八四）生れと明治三〇年（一八九七）生れの二人の詩人の年齢差は一三年、明治と大正の青春をそれぞれ象徴していますが、相識することはなかったでしょう。しかし、中学校卒業までは琵琶湖畔で育って、三高・京大では「逍遙の歌」「林下のたむろ」のほか三篇も水上部歌を作った沢村胡夷、片や諏訪湖畔に育って、三高では水上部・弁論部で活躍し、「琵琶湖周航の歌」を作った小口太郎、小口は大正一三年五月一六日、二六歳で自殺するという悲劇的な最後をとげますが、二人は時代を異にして、かつ連続する世代の天性の詩人でありました。この二人の天性の詩人は、湖という水でつながっている因縁にあった、

とすら思えるのであります。

沢村胡夷が京都帝国大学助教として赴任して一〇年の歳月が流れました。昭和四年一二月、沢村胡夷は大英博物館ローレンス・ビニヨン氏を近畿・高野山に案内し終えて、神戸港に見送つての帰洛の途中で倒れて、大阪で入院しました。昭和五年五月二三日、満四六歳の生涯を閉じました。糖尿病と急性肺炎でした。逝去の日、京都帝国大学教授昇任の報が届けられました。大阪の朝日新聞と毎日新聞は、沢村胡夷教授の生前の経歴・業績について大きく報道したとのことです。京大考古学の浜田耕作教授（号、青陵。明治三五年第一部文科。のち京大総長）は、京都文学会機関誌「芸文」（昭和五年七月）に、「あ、沢村君」と題して追悼文を寄せました。

七、寮歌の親和力など

再び、紅もゆる「逍遙の歌」に戻りまして、この歌と他の少数の三高知名歌が身に付けている、社会に対する親和力とでも言う点について、私の視野から申してみたいと思います。戦後、三高生を主役や脇役とした映画・テレビ劇が上映されたこと屢々でした。六六年三月一杯、歌舞伎座でズバリ「紅萌ゆる」（依田義賢作、橋幸夫主演）なる二幕六場の劇が上演されました。連続テレビ劇では「いのちある日を」「わたしは海」「生きて行く私」（一回もの）等々、枚挙にいとまなしです。その理由をかつて、板倉創造さんは、「三高こそが、全国の高等学校中で最も高

等学校らしい高等学校であったからだろう」との名答を吐きました。「逍遙の歌」にいたっては、もっとはるかに多く、映画・テレビ・ラジオによって歌われました。「琵琶湖周航の歌」「山岳部歌」も同様で、これらはもはや国民歌謡とされていると言うべく、カラオケのレパートリーに常備されています。板倉さんの名言に倣って言えば、とりわけ「紅もゆる」は全国高等学校の歌のうちで、最も高等学校の歌らしい歌である、からでしょう。誰しも好ましいと憚れるであろう京都という地の、優れた自然美と四季の移ろいの描写の裡に、若人の夢と理知と心意気を見事に謳いあげているからでしょう。同時に魅力に満ちた名曲譜によっているからでしょう。

思い出しますと、戦争中でしたが、戦争に協力しているような、暗に反対し平和を訴えているような妙な映画に「新雪」というのがありました、申請を受けて芸済会（芳済部）から三高歌集を一部貸与したことがあります。戦後まもなく「わが青春に悔なし」（黒沢明監督）という京大事件をヒントにした感動的な映画ができて、公開に先立って東大講内で上映されました。京大でも同様と聞いております。また、「きけわだつみのこえ」（関川秀雄監督）という悲痛な映画もありました。この三つの映画だけ想起しても、いづれも最終場面は「紅もゆる」の独唱、斉唱、独奏、合奏などで劇の感動を盛りあげています。

ところで戦後、見事に変容を遂げた旧帝国大学や一流私立大学と決定的に違って、学制改廃上の悲運に立たされた三高とすべての高等学校は最も自由主義的で民主的内容であったのにもかか

わらず、大学への吸収合併の措置のもとで消滅して、半世紀に垂んとします。「旧制高校」「旧制三高」という言葉もいつまで通用し、残るのでしょうか。三高卒業生・修了生も二一世紀前半中にいずれ一人もいなくなりません。当然「紅もゆる」を歌った、その体験者はいなくなります。そこで、思い出の歌であれ、国民歌謡のひとつとしてであれ、はたまた観光宣伝の手段としてであれ、今はよく知られている「紅もゆる」の歌が、さらに「琵琶湖周航の歌」「山岳部歌」「チンチロケ踊の歌」もですが、年月の足言にかき消されずに、忘れられることなく永久に歌い継がれ聴き継がれてゆくならば、そのことを願う者のひとりとして、私はそれを喜ばしいこと、結構なことと思う次第であります。

以上、雑駁な説明と勝手な所見でございましたが、このへんで終わらせていただきまして、ご静聴のほどを感謝いたします。

(当日平成7・3・13(月)三高十二日会でお話した拙稿の内容を、多少とも読み物に向くようにと、また保存的資料記録のために役立つようと、若干の修正・補充をしました)

(著述業)